

関連学会印象記

第52回日本輸血学会総会

小堀 正雄*

第52回日本輸血学会総会は、北海道赤十字血液センター所長 池田久實先生の総会長のもとで、去る平成16年6月23日(水)、24日(木)、25日(金)の3日間にわたり、札幌コンベンションセンターで開催された。本総会のテーマは「患者のための輸血医療」であった。本学会総会の特徴は、日本医学会分科会に属していながら参加する会員の多くは非医師であることから、プログラムの編集に当たり日常の輸血業務に役立つもの、あるいは輸血検査と臨床を結びつけるのに役立つテーマが多い。教育講演15テーマのほか、特別講演1、シンポジウム8、ワークショップ3、トピック1、勉強会、イブニングセミナー、ランチョンセミナー9、と盛りだくさんである。主な会場はポスター発表場以外に3ヵ所に絞られているが、この内容が会場をフルに活用しながら進めてゆく。さすがに総会の時だけは他の会場は使用しなかったが、それ以外は常に並列で進められるため、わずか3会場に集約できたことから、この中に自分の興味のあるテーマを選べば良いため聞き漏らしがないほどだ。この程度の会場確保ならば同じ施設内で済むため移動も簡単である。たくさんの会場で学会が進行すると結局は何一つ最初から聞くことが出来ずウロウロするだけのことが多い事からも他の学会でも見習ってほしいと思った。本学会の一般演題の発表方法が毎年変わるのには面食らう。今年はポスターを貼り、中でも口演できるものとポスター前で発表するのに分けられていた。この方が発表者に緊張感を与えられるため良い。昨年はたしかポスター前に一定時間発表者が立っていただけで多くは質問もなく気が抜けたことを覚えている。さらに以前にはポスターを貼ったあとスライ

ド発表が3枚3分の時もあり、案の定時間延長が相次ぎ小生も帰りの飛行機の時間にヒヤヒヤしたこともあった。多くのすばらしい講演の中でも小生が麻酔科医であるため実際の臨床に則しなれば内容が理解できない事が多数あるのもこの学会の特徴である。たとえば輸血検査や幹細胞生物学にはお手上げだ。血液センターや輸血行政には興味がわいても日々の臨床には直接役立つものではない。しかし前者は輸血部、後者は血液センターの立場にいる人には大変役立つのであろう。逆に大量出血や適正使用になると明日の臨床から役立つ。このように異なる職種の人たちが一堂に会するのが輸血学会である。でも最近の傾向として発表内容が臨床に軸足を移してきている事が実感される。小生が10年前本学会に参加した頃はほとんどの演題が臨床家では理解できない内容で大変困った事を覚えている。今日、本学会が必死で臨床家にラブコールを送っているのに医師の出席が少なくこれに気づかないと見えるのは小生この学会に少し肩入れしすぎであろうか。以下小生が出席した内容を中心に印象を述べる。小生も「適正な輸血療法の推進に関する委員会」、「自己血輸血推進小委員会」に属しているが、なんと学会前日火曜日の昼に開催、残念ながら臨床現場に身を置くものとして欠席した。これらの委員会は水曜日なら何とかなってもさすが火曜日の昼には札幌に行くのは至難のわざと言わなくてはなるまい。

第一日目、血漿分画製剤の教育講演であるが、普段からアルブミン、凝固因子製剤、ハプトグロビン位しか知らない者には驚くばかりであるが、中でも血友病が最も現実的に重要である事が再認識された。シンポジウム「輸血管理と適正使用」、「輸血医療における危機管理」を続けた。前者はまだ立ち遅れている輸血療法委員会を早く各病院で

*昭和大学藤が丘病院麻酔科

立ち上げる必要性、それが安全な輸血実施システムの構築、その結果血液製剤の保険査定の観点から捉え、最後にMAPと抱き合わせで使用されているFFPとの使用制限までにいる話しは面白かった。後者は、国、血液センター、輸血部での危機管理であり、献血対策、災害時での輸血の供給、病院内での安全管理についての各立場での報告である。手術室での輸血は多くの関係者によって支えられている事が分かる。最後に患者代表が要望の形で安全な輸血体制の確保を主張した。一日目の終わりには市民公開講座で「輸血の安全性をどこまで求めるか」は誰にでも理解しやすい内容であった。多くの出席者があった。

第二日目、小生は「大量出血では新鮮血輸血は必要なのか」というシンポジウムを聞いた。常識的には「いまさら生血」の感があるが術者の意見は異なる。つまり理屈ぬきで「生血」の危険性を顧みず行い有効であったとの症例も見られたが、理論的には成分輸血を上手く利用すれば生血は不要である事は百も承知である。ついで、教育講演で血液センターの発する輸血情報についてである。輸血とは近くて遠いもののため、Rh式、有効期限をはじめ血液製剤の品質、成分についての質問が多いようである。早くQ&Aのようなマニュアル本が出来れば簡単に対処できるようになると考えられる。ランチョンセミナーは「周術期における赤血球輸血の実際」であり輸血管理室にいる輸血部員や血液センター職員には分かりやすい内容であった。そのほか、輸血の臨床の一般口演もあった。そうしているうちポスター討論がまもなく始まった。6分間で説明し4分間で質問を受ける通常パターンだ。案外質問がどこでもあり白熱する時間である。内容はともかく、どのポスターも一生懸命作られて

おり小生のポスターが一番あっさりしていた。発表風景も紙片を見ながらの演者は一人もいなかった。また各自の服装が華やかなのはいつもながらで、麻酔科関連学会で見られる圧倒的な地味な背広姿は会場内では3分の1くらいである。この雰囲気は惹かれて小生はつい毎年この学会に来てしまう。理解していただきたい。夜は札幌ファクトリーでの懇親会があった。臨床系の学会では懇親会費を申し訳程度集めるが本学会ではいつも4,000~5,000円はザラである。企業からの援助は全くないようである。出席してみると予想外に盛況で4会場を借り切っていた。カニやラーメンはあったが雲丹、イクラを必死で捜索したが見つからなかった。この会場間をサッポロビールのジョッキを片手に階段を上り下りするのは正直言ってきつかった。それでもアトラクションなど多彩な催しがあり華やかな雰囲気であることは言うまでもない。循環制御医学会の会員の皆様も機会があれば一度は札幌ファクトリーに足を向けることをお勧めする。

最終日、内容も盛りだくさん。一般に学会最終日は気分がダレるのが普通であるが本学会は違う。教育講演が目白押しで「輸血のEBM」、「人工血液」、「遺伝子治療」、「血小板輸血副作用」、「採血時副作用」と多数で、どれをとっても麻酔科医として身になる内容である。そしてポスター発表が昼前にあり、これを終えた人がランチョンセミナーをパスして札幌の街に繰り出す姿が見られた。しかし午後も教育講演、そして輸血問題検討部会が午後6時まで続きようやく閉幕を迎えた。

なんと言っても、今回の学会は会員をどこまでも飽きさせることなく札幌まで来た事を後悔させないようにしっかりプログラムが組まれていた。総会長の運営に感謝しながら帰路に着いた。